

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370155

研究課題名(和文)映画速度論の構築

研究課題名(英文)Towards a View of Speed in Cinema

研究代表者

応 雄(YING, Xiong)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50322772

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代的技術としての速度、表象としての速度、生成変化の速度という三つの方面に分けつつ、理論書の精読、研究論文執筆・研究発表遂行、研究集会の開催を実施することをおして、ヨーロッパ映画(ジャン＝リュック・ゴダール、ジャン・ルーシュ)、アメリカ映画(オーソン・ウェルズ)、中華圏映画(婁燁、王家衛)における映画速度の事象を具体的に検討し、速度と時間をめぐる映画論の構築を試みた。また、映画における身体と空間にまつわる諸事象にも考察を加え、映画速度論の構築に重層的な厚みをもたらした。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on three aspects concerning speed in cinema: speed as modern technique, speed of representation and speed of becoming. By closely reading books for reference, publishing essays and giving presentations, this research made examinations of the representations of speed in the films by Jean-Luc Godard, Jean Rouch, Orson Welles, Lou Ye and Wong Kar-Wai, aiming at a new view of speed and time in cinema. In addition, this research also investigated the representations of body and space which relate speed, in cinema.

研究分野：映画研究

キーワード：映画と速度 第三の時間と映画

1. 研究開始当初の背景

映画は第七芸術と呼ばれるが、その誕生時から、速度に関わる近代的技術でもある。古典映画理論や批評では、映画における芸術表現や美学的側面が探求され(ジャン・エプスタン、エイゼンシュテイン、ベラ・バラージュ、アンドレ・バザン、ジャン・ミトリ...) クリスチャン・メッツ以降は、記号学、精神分析、イデオロギー批評、フェミニズム、ポストコロニアル理論などが映画研究を先導してきたが、映画における速度の面が本格的に検討されたことは、いまだにないといっても過言ではない。

映画作品はそのそれぞれの性質やスタイルによって、観るものに「速い」、「遅い」といった印象を与える。そういった漠然とした「速い」、「遅い」から出発して、映画の表現に内在する速度の問題を精査することが、映画研究あるいは映像表象研究の領域において推進されてしかるべきである。

2. 研究の目的

映画における速度に関する考察は、少なくとも次に記述する三つの方面において展開される。

(1) 近代的技術としての速度。エドワード・マイブリッジは疾走する馬の脚運びを捕捉するために、連続写真といわれる方法を使ったが、それは被写体の運動速度に対応するシャッターの作動速度やフィルムの露光速度に関わる発明でもあり、1秒間に18コマまたは24コマからなるシネマという表象機械の誕生につながるものであった。映画は、被写体の運動速度、および肉眼による人間の知覚の感知速度に対応しつつ発明されたと考えてもよい。

ベルナルド・スティグレルは『技術と時間』シリーズをはじめとする諸著作で、西洋形而上学における、思考の道具とされる技術への抑圧を問題視し、哲学史の根本的問題として技術と存在の問いを立て直した。この文脈において映画速度の問題を検討する際に、スティグレルやデリダが考察した記憶産業としての写真と映像における幽霊性の問題(『技術と時間2 方向喪失』、『テレビのエコグラフィ』など)がかかわってくる。差延や「幽霊」が我々に到来するのは「速すぎる」か「遅すぎる」のどちらかになるはずである。ここではとりわけこの方面の諸論考を精読し、理論的な諸問題を整理する。

(2) 表象としての速度。固定撮影に大いに拘束されていた生誕期の映画は、被写体の運動速度しか、速度といえるものは持たなかったように思われる。グリフィスは古典映画の技法と文法を発明したが、このことによって彼は、映画が物語を分節する能力を高めただけでなく、映画の速度、すなわち、異なるサイズのショットの組み合わせや異なる空間・時間を横断するパラレル編集によって映画が手にした表象の速度をも、決定的に高め

てくれたのである。一方、エイゼンシュテインのモンタージュは、異なる次元への飛躍という意味において、表象速度の絶対的上昇を生み出したのである。

映画史的に見れば、初期から現在に至るまでの映画は、とにかくますます速くなってきたといえる。1960年代は、映画が俄かに速度を高めた時代であった。表象される速度、表象することの速度、そして両者の併用(速い運動を速いリズムで表象する)がいかなる相貌を帯びるかを検討する。

(3) 生成変化の速度。映画には、より謎めいたいまひとつの速度がある。それを生成変化することそのものの速度と名づけておく。ジル・ドゥルーズは(ときにはガタリとともに)『千のプラトー』『シネマ』『哲学とは何か』といった書物で、生成変化について語るが、その指摘によれば、「動物になる」、「女になる」、「知覚しえぬものになる」ともいわれる生成変化は、一つの項やものをなす代わりに、それ自体において「一性」なる内在的な「存立平面」をなしており、それはすべての存在が速さと遅さによってのみ区別される巨大なる抽象機械である。「動物になる」、「女になる」といわれる生成変化は、まさにオーソン・ウェルズの『F for Fake』で提示されるように、偽なるものと裏切りを生きることであり、生成変化した結果、名詞としての「動物」や「女性」になってしまうのではなく、何かに「なる」という動詞的な行いにおいてのみ理解されるのである。そうしたつねに動詞的な存立平面に立脚した場合、速度を巡る問いは必然的に現れる。

ドキュメンタリー映画に纏わる真/偽の問題も、生成変化の速度の次元において解読されるべきであろうし、ゴダール映画に見られるジャンプ・カットと、遥かにジャンプ・カットを超え、不可解ゆえに絶望なほどまで観る者を追いこむ切断的な編集法も、時間と精神と未来にのみ立脚するその映画が必然的に内包する秘密的な速度を物語るものでもある。

ドゥルーズなどが其処彼処で発する速度についての見解を映画において緻密に検証し、これまでなされてこなかった体系的な映画速度論の構築を目指す。

3. 研究の方法

映画史的な実証研究を含みながらも、基本的に理論的な検討と構築を中心とする。研究を着実に推進するに際し、とりわけ理論書の精読、映画史的検証、コンセプトの整理・検討、論述の展開・構築といった地味な作業を行なう。いっぽう、当該分野の研究者と本課題についての意見交換を図るべく、国内外の多くの研究会で研究成果を発表するなど、研究推進にあたりなるべく理論構築の活性化を図る。

本研究はとりわけ以下の三つに分けつつ推進する。

(1) 近代的技術としての速度。まずは、映画前史から初期映画、古典映画にかけて、イメージのフィルムへ転写される速度がどのように確立していったかを調査・整理する。この研究作業は、基本的に映画史的な実証研究となるが、『シネマ1』の冒頭の章で展開された議論にも見られるように、当該作業は、「イメージ論」とも呼ばれる理論的な視点をも欠かせない。この点に関する記述は、まとまった研究書がないため、多くの書物や文献から関連記述を集め、それに基づいて、理論的な問題を意識しつつ整理する。いま一つの作業は、デリダやスティグレルの諸論考に関連し、産業化した記憶としての映像が有する技術哲学の面についての理論的考察となる。とりわけ、「第三の記憶」ともされる映像アーカイヴにおける幽霊性を、映像的記憶と速度の問題と絡めつつ探索する。この作業は、理論書の精読と論旨の整理がメインとなる。

(2) 表象としての速度。ここでは、表象される速度、表象することの速度、両者の併用、これら三点における映画史の実態を素描し検証する。具体的には、速度的にバランスがよくとれたともいえる「落ち着く」古典映画や、速度の急進する1960-70年代のアメリカ映画、同じく速度の面において目まぐるしい変貌ぶりを見せた香港アクション映画、そしてニュー・ウェーブを経験する最中にあったアジア映画などに多く現れたテンポの遅い作品群などが、史的かつ理論的に精査する中心的対象となる。

(3) 生成変化の速度。作家映画や現代映画と呼ばれる作家作品における、速度と関わる諸側面を精査することが、このユニットの主たる研究内容となる。

偽りと裏切りを極限まで表現するオーソン・ウェルズ、グリフィスやエイゼンシュテインは編集を理解していないと暴言し、常に謎めいたイメージ連結法を実践するJ.L.ゴダール、顔と身体に崇高をもたらしたかのように諸々の顔や身体を追跡し続けるジョン・カサヴェテス、ゴダールの編集法を試みもする黒沢清など、このユニットでは、これらの作家たちの作品を対象として緻密に分析し、彼らが独占しもするそれぞれの映画の秘密を、表象されない速度の次元において明かしていく。個性的でときには難解なこれらの作家作品に関する理論的考察は、理論面の吟味と作品面の緻密な分析を要するが、本研究の最重要な部分をなすものである。

初年度に台湾淡江大学で開催される The First International Deleuze Studies in Asia Conference において研究報告を行ったが、この conference に参加した、ドゥルーズの文学論・映画論・芸術論に関する研究書シリーズを執筆した高名な研究者である Ronald Bogue 氏をはじめとする欧米やアジアの研究者と本研究課題について意見交換を行ない、各国の研究者に研究の連携と協力を

要請した。このことが二年目と三年目に開催したワークショップ、研究集会にだけでなく、Cambridge Scholars Publishing が刊行した論集での研究成果の公開にもつながった。

4. 研究成果

(1) 研究論文の執筆と発表

それぞれの映画作家において速度にかかわる問題はどのように提示されているかを解明すべく、研究論文を3点執筆した。以下はその概要。

“Body/Space and Affirmation/Negation in the films of Lou Ye and Wong Kar-Wai”

婁燁と王家衛の映画において、空間表現は似て非なるものである。前者において空間は「曖昧集合」をなすのにたいし、後者における空間は、むしろ集合を曖昧にするにすぎないようなものである。その違いの理由は、過去に囚われ、記憶の円環をいきること(王家衛)と現在に生起する力能の表現(婁燁)という根本的な差異にある。何かが肯定されている、あるいはされていないという根本的な問題に触れつつ、本論文は両者間の空間表現、映像提示の速度について理論的に考察し、これまで誤解が散見する両監督の作品にまつわる言説に抗い、新しい知見にみちびく考察を試みた。

「ゴダール、アクション、未来(1)」

蓮實重彦が指摘したゴダール映画における「破局的スローモーション」の読みと言及することから出発して、本論文は、ゴダール映画は本質的にアクション映画であること、しかしそれは第三の時間におけるアクションであることを論証した。とりわけ、ドゥルーズが『差異と反復』や『シネマ2』で展開させた諸思考に関連づけつつ、これまで明らかにされていなかったゴダール映画に内在する(第三の)時間と速度の問題を理論的に考察した。論文のつづきの(2)の部分は、「と(et)」、あるいは「間(entre)」の問題とゴダール作品における歴史・反復の問題にスポットを当てつつ執筆中。

「德勒茲的奥遜・威爾斯電影論 人物論、尼采、未来(ドゥルーズのオーソン・ウェルズ映画論 人物論、ニーチェ、未来)

『シネマ2』第6章で取り上げられたオーソン・ウェルズの作品に『F for Fake』が挙げられている。本物なのか贋作なのかが分かりようなない絵を生涯作り続ける贋作画家、数十個の名前をもつ大富豪、贋作画家についての本を、また得体の知れない富豪の偽伝記を書く記者……。そして、ある島でピカソとオヤという女の間で起きた出来事、それもウェルズの扮する魔術師にすべてがウソであったと宣告されてしまう。この映画は、純然たる偽りの世界を提示する。最初に、ウソが一つあり、そしてこのウソを「真」の座標に照準して裁く代わりに、ウェルズは、さらなる多くのウソ、ますます活動的で力強いウソへと導いていくのである。しかし、同作品は

あくまでウェルズが『上海から来た女』以来展開してきたプロジェクトの帰結である。裁きの体制と戦うウェルズ作品は、ニーチェ的な価値判断の思考にも似て、「生の哲学」と響きあう。本論文は、ドゥルーズが『シネマ2』第6章で展開した思考を整理したうえで、とりわけ『ツァラトゥストラはこう語った』第4部の内容に触れつつ、オーソン・ウェルズ作品の人物類型・系列を第三の時間(未来)においてこそ生起する事象として捉えた。

それぞれ英語・日本語・中国語で執筆した上記三点の論文は、映画作家作品における速度と時間、生成変化の速度といった諸問題を学術的新規性を目指して独自に究明した。

(2) 研究口頭発表、招待講演

学会発表欄で挙げた通り、日本や中国、台湾の研究機関で日本語・英語・中国語による口頭研究発表や講演を7件行なった。そのうち

は研究論文に発展させたもので、はカサヴェテス映画における関連問題についての考察で、はドキュメンタリー映画における真/偽問題を速度と時間の問題に関連させつつ考察したもので、はスピノザの『エチカ』に照らして『シネマ』の全体的構成を垣間見る試みである。これらの研究発表を行なうことによって、研究期間中に達成した研究成果を国内外で発信することができ、本研究課題をめぐって複数の視点による総合的な考察を行うことができた。

(3) 研究集会(ワークショップ、シンポジウム)の開催

研究期間中、本研究課題にかかわる研究集会を複数回開催し、国内外の多くの研究者に本研究に加わってもらい、本研究テーマをめぐって議論を深めた。以下はこれらの研究集会の概要。

「映像を思想する」研究集会、2013年9月10日、於北海道大学。中山昭彦(学習院大学)「『めまい』と現在の回想」佐藤淳二(北海道大学)「これは世界ではない: 初期フーコーと表象の問題」川崎公平(明治学院大学)「死体を抱きしめて 田中登のロマンポルノ作品についての小さな考察」応雄(研究代表者)「光の形象と探しまわる犬の流儀 『シネマ』における未来」と、計4点の研究発表が行われた。ヒッチコック、初期フーコー、日本ホラー映画(田中登)、スピノザといった思想系、映画系の人物・作品をめぐって、速度の問題と絡めながら考察した。

「映画における 速さ と 遅さ 日中映画の場合」研究集会、2014年3月6日、於北海道大学。周安華(中国南京大学)「节奏的背后: 時間與現代性 中国 現象電影 的速度変奏」(リズムの背後: 時間とモダニティ 中国の「現象電影」の速度変奏)、阿部嘉昭(北海道大学)「黒沢清、遅/速の攪乱者」Zhou Dongying(浙江伝媒学院大学)

「Sparseness and Slowness -Analysis of Movement in Jia Zhangke's Films」井川重乃(北海道大学)「加速/減速する日本映画 北野武『ソナチネ』を例にして」と、計4点の研究発表が行なわれた。現代中国映画と現代日本映画における速度の表象に焦点を当てつつ、日中映画における速度表象の問題について考察を深めた。

「台湾映画と速度表象」研究集会、2014年6月10日、於北海道大学。Jiann-guang Lin(台湾国立中興大学)「Acedia, Apathy, and Allegorical Slowness in Tsai Ming-liang's Goodbye, Dragon Inn and I Don't Want to Sleep Alone」Yu-lin Lee(台湾国立中興大学) / Shan-Hui Hsu(台湾国立成功大学)「How Does One Become a Master of One's Speed: Foldings in Ang Lee's Life of Pi」Pei-ju Wu(台湾国立中興大学)「Migrant Cosmopolitanism or Slow Journeys of Snow-whites: New Immigrants Films in Taiwan」Dominique Ying-Chih Liao(台湾国立中興大学)「Impotent Violence: the slowness, stillness and concealedness of Taiwanese gangster films」と、計4点の研究発表が行なわれた。蔡明亮(サイ・ミンリョウ)、アン・リー、台湾「新移民映画」、台湾ギャング映画に見られる「速さ」と「遅さ」の諸事象を考察することを通して、1980年代以降の台湾映画における速度関連の諸問題をめぐって理解を深めた。

「映画と身体」研究集会、2015年10月22日、於北海道大学。黄献文(中国武漢大学)「女性 国家/民族の苦難の隠喩」川崎公平(北海道大学文学研究科)「女たちの声と男たちの身体 『雨月物語』再考」応雄(研究代表者)「身体、空間、物語 ジョン・カサヴェテスの『フェイスズ』の場合」と、計3点の研究発表が行なわれた。「文革」を題材とする現代中国映画や、溝口作品、カサヴェテス作品における身体表象について考察と意見交換を行なった。映画速度論をめぐる考察はかならず身体の問題と絡むわけだが、本研究集会は、中国、日本、アメリカのそれぞれの事例をめぐって身体の表象と速度の表象の絡み合いについて考察を試みた。

上記の研究論文、研究発表、研究集会を推進する過程で、速度論の考察はかならず身体の問題および身体と空間の関係性の問題を絡み、それについての検討も要することが浮上し、そのため、身体と空間に関する検証もその内容の一部となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

以下はすべて研究代表者によるものである。

〔雑誌論文〕(計 3 件)

応雄、「德勒茲的奧遜・威爾斯電影論 人物論、尼采、未来(ドゥルーズのオーソン・ウェルズ映画論 人物論、ニーチェ、未来) 『当代電影』2016年 vol.6、査読無、40-46頁、2016年。

応雄、「ゴダール、アクション、未来(1)」、 『層 映像と表現』 vol.8、査読無、83-108頁、2015年。

Xiong Ying, “Body/Space and Affirmation/Negation in the films of Lou Ye and Wong Kar-Wai”, in *Deleuze and Asia* (ed. Ronald Bogue, Hanping Chiu and Yu-lin Lee), Cambridge Scholars Publishing, 163-181, 2014. (査読有)

〔学会発表〕(計 7 件)

応雄、「奥遜・威爾斯電影人物論」(オーソン・ウェルズ映画人物論) 武漢大学芸術系映画研究集会招待講演、武漢大学(中国) 2016年3月24日。

応雄、「身体、空間、物語 ジョン・カサヴェテスの『フェイスズ』の場合」、映画と身体研究集会、北海道大学(札幌) 2015年10月22日。

応雄、「婁燁(ロウ・イエ)の映画にみる身体以上、空間以下」、2015年日中社会学会年次大会、北海道大学文学研究科(札幌) 招待講演、2015年6月6日。

応雄、「為了真而必須開始虛構 記録、虚構、仮構(He Has to Start to Tell Stories in Order to Affirm himself as Real: Documentary, Fiction and Fabulation)」、ワークショップ“Imagining the Future: the Utopian, the Dystopian and the Posthuman”、上海戲劇学院(中国) 2014年11月14日。

応雄、「婁燁和王家衛電影中的身体和空間」(婁燁と王家衛の映画における身体と空間) 台湾国立中興大学人文社会研究中心(台湾) 招待講演、2013年6月3日。

応雄、「光の形象 と 探しまわる犬の流儀 『シネマ』における未来」、「映像を思想する」研究集会、北海道大学(札幌) 2013年9月10日。

Xiong Ying, “ ‘What can a Body Do?’ : The Betweenness of Body and Space in Lou Ye’s Summer Palace and Spring Fever ”, The First International Deleuze Studies in Asia Conference, Tamkang University (Taiwan), June 2, 2013.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

応雄 (YING, Xiong)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50322772

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：